

金城朝永と琉球学の構想

並 松 信 久

目 次

- 1 はじめに
- 2 伊波普猷の影響
- 3 琉球語と民俗学
- 4 沖縄学と琉球学
- 5 結びにかえて—沖縄学の可能性

要 旨

本稿は昭和期に活躍した沖縄研究者である金城朝永を取り上げ、金城が唱えた「琉球学」の構想について考察した。これまで金城に焦点をあてた研究は数が少なく、その数少ない研究は「沖縄学」と金城の研究との関連を明らかにしたものである。しかも研究成果は主に1970年代に出されているので、沖縄返還（1972年）という歴史的背景に大きな影響を受けている。つまりこの歴史的背景によって金城の琉球学を見直そうとするものであったが、琉球学は消えてしまう。琉球学がなぜ消えてしまったのかは明らかではない。本稿は金城の研究業績の再評価をして、琉球学がなぜ消えてしまったのかという問題について考察した。

金城は夭逝したこともあり、琉球学を体系化することはできなかった。体系的な研究成果も残していないので、琉球学は消えゆく運命にあったといえる。しかし言語、民俗、文学、歴史など広い分野にわたって多彩な研究活動をみせ、体系化の方向性はもっていた。これは今日における沖縄学がもっている排他的傾向とは異質のものであったといえる。もし琉球学という言葉に、積極的な意味を付与して考えるとすれば、伊波普猷に代表される沖縄学の系譜において、金城は言語学、歴史学、文学、民俗学など多様な分野にわたる研究を総合することを試みた唯一人の後継者であったといえる。

キーワード：金城朝永、琉球学、沖縄学、伊波普猷、民俗学

1 はじめに

きんじょうちようえい
金城朝永（1902-1955、以下は金城）は昭和期に活躍した沖縄研究、とくに琉球方言に関する研究者である。伊波普猷（1876-1947、以下は伊波）の影響を受け、さらに柳田国男（1875-1962、以下は柳田）らによる「南島談話会」にも参加して、研究成果をあげている¹⁾。金城は東京外国語学校（現・東京外国語大学）で学び、1926（大正15）年に卒業し、同年に伊波の紹介で、博文館館長の経営する大橋図書館司書となっている。しかし1930（昭和5）年に図書分類について館長と意見が衝突し、大橋図書館を辞職する。それ以後、改造社、三省堂などにおいて編集委員をつとめながら、沖縄研究を行ない、『那覇方言概説』『異態習俗考』などの著

書や、多くの論文を残している。

金城の研究業績は、大藤時彦・外間守善編『金城朝永全集』（全2巻、沖縄タイムス社、1974年、以下は『全集』と略す）に収められている。『全集』に収録されなかったものは、『沖縄文化』誌の第43号（1975年）に、金城朝永特集として収められている。『全集』に収められた論文は全部で68篇であり、内容で大別すると三つに分かれる。第1は「琉球学」の基礎的な資料ともいえるべき専門的な論文である。第2は沖縄について関心をもった点での解説や随想類である。第3は沖縄文化研究にかかわった人びとの研究成果や活動についての丹念な紹介や、研究史、文献解題の類である²⁾。これら研究業績の多くは「琉球学」構想に包括されるものといえる。

全2巻のうち上巻は言語・文学篇として、第1に関連する著書『那覇方言概説』（1944年）をはじめ、チェンバレン『琉球語文典』の訳出中（全訳が完成していたが、戦争中に焼失する）、焼失を免れた「序論」（1927年）と「琉球語より観たる日本語動詞活用の起源に対する試論」（1934年）、そして「沖縄地名考」（1938年）、「琉球民謡の起源と変遷」（1954年）、「オモロの創作過程について—オモロ研究試論」（1953年）などである。第2に関連するものは、「琉球方言の比喩法」（1929年）、「沖縄那覇児童の言草謡」（1931年）、「沖縄俚諺集釈」（1932年）などである。第3に関連するものは「おもろ研究前史—田島利三郎先生評伝」（1937年）、「琉球に取材した文学」（1948年）などである。

下巻は歴史・民俗篇として、第1に関連するものは「沖縄現代史序説」（1952年）、「ゲーン（萱）とグーサン（杖）—琉球神道における祭具について」（1953年）、「琉球の歴史と文化」（1953年）、「亀井琉球守」（1955年）などである。第2に関連するものは、著書『異態習俗考』（1933年）をはじめ、「村落としての辻」（1938年）などである。第3に関連するものは、「伊波普猷先生の生涯とその琉球学」（1948年）、「沖縄研究史—沖縄研究の人とその業績」（1950年）、「琉球関係記事目録（明治年間雑誌所載）」（1932年）などである。

現在、沖縄に関する研究を総合的に把握する言葉として「沖縄学」という呼称が用いられている。もっとも沖縄学という呼称は、学問上の呼び名として十分に成熟し、定着しているとはいえず、その呼称に対して批判的な意見もある。沖縄学という言葉は、いつ頃から誰によって使われたのかは明らかでない。『全集』の編者である外間守善（1924-2012、以下は外間）によれば、それを最初に使い始めたのは金城であるという。しかし金城は沖縄学よりも琉球学という言葉を好んで使っていた。それにもかかわらず実際には沖縄学という呼称が定着した。琉球学という言葉は、その後、他の人によって用いられることなく消えてしまう。その一方で沖縄学という言葉が定着していく。

1955（昭和30）年に金城は東京において54歳の若さで夭逝する。金城は自らの学問を体系化することなく亡くなってしまった。『全集』という幅広い学識に支えられた豊饒な沖縄研究が、未完のままとなっている。金城の琉球学は体系化されることなく、その確立をみることなく、

途絶えてしまった。本稿では金城の琉球学がどのように構想されていたのか、そして沖縄学という呼称に変わり、金城のめざした琉球学の構想がどのように変わっていったのかを考えていくことにする。もちろんこの考察は、沖縄学とは何かという問いかけに通ずるものである。

ところで金城自身の業績は『全集』にまとめられているものの、金城に関する研究は皆無に等しい。わずかに新川明「『沖縄学』の可能性—『金城朝永全集』にふれつつ」(『文学』, 第42巻8号, 1974年, 16~25ページ)と仲程昌徳「インフェリオリティ・コンプレックスからアイデンティティーへ—『金城朝永』私論」(『新沖縄文学』, 第33号, 1976年, 75~84ページ), そして外間守善「金城朝永と沖縄学」(外間守善『沖縄学への道』, 岩波現代文庫, 2002年, 119~24ページ)があるにすぎない。いずれも金城を扱っていると同時に、沖縄学との関連を論じている。前2編は約40年前の研究業績であり、当時の歴史的な背景に大きな影響を受けている。もう1編も刊行年は新しいものの、元々は『金城朝永全集』の編集・刊行にふれて、同時期の1974年に書かれたものである。つまり当時の沖縄の最大の問題であった沖縄返還(1972年)をめぐる動向に大きな影響を受けている。

沖縄返還前後の状況については、沖縄の施政権がアメリカから日本に返還されたものの、その時改めて、明治期から問われてきた問題が浮き彫りになるという状況があった。歴史的に中国、日本、アメリカという大国に翻弄され続けた沖縄が、改めてその存在を問われることになった時期ともいえる。その課題に応えるかのように、沖縄学がさかんに問われるようになった。上記の研究業績は、このような状況のなかで出された。いずれも沖縄学の高まりのなかで、金城の琉球学を見直そうとするものであった。しかし琉球学がなぜ消えてしまったのかについては明らかではない。これについては金城が夭逝しまったので、未完に終わったということに帰結している。本稿では金城の琉球学がなぜ消えてしまったのかという問題についても考えていきたい。本稿はわずか3編しかない金城研究に、沖縄学をめぐる展開をふまえて、新たな知見を加えようとするものである。つまり金城の投げかけた問題に、どのように答えるべきかを探り、改めて金城の研究業績を再評価しようとするものである。以下では金城の琉球学構想の展開を中心に、年代を追う形で考察を進めていきたい。

なお「沖縄」という名称については、一般的に元来、沖縄地域に対する本土側の名称とされる。しかし現在は共通語として自称・他称を問わず用いられている。通説では名称上の古史料があるとされるが、1879(明治12)年に琉球藩を廃して沖縄県を設置したことによって、政府の公称に用いられるようになった。それ以後、主に政治経済的な意味で、日本に包摂された「異質な地域」を含意する用語として用いられることが多い。これに対して「琉球」という名称は沖縄文化の占める領域の別名といえる。したがって沖縄文化を琉球文化と称しても誤記ではないが、いずれが妥当かは、個々の研究者によって異なり、争点にもなってきた。廃藩置県後の琉球の名称は、本土の人びとによって国内の異文化名として悪用され、また琉球人の名称は蔑視の代名詞となった。一方、沖縄では政治的色彩の濃い名称として使われることが多

い³⁾。金城は琉球学の構想をもつが、その著書や論考には沖縄を冠したものも多い。これは金城が沖縄文化を中心に考察を進めたために、琉球の名称を冠した一方で、悪用や蔑視を避ける意味で、沖縄という名称を使ったと考えられる。この辺りにも、沖縄の個性と同化をめぐる金城の苦悩がうかがえる。

本論に入る前に、金城の経歴について概略しておく。

- 1910 (明治 43) 年 (9 歳) 伊波が主宰する「子供の会」の会員になる。
- 1914 (大正 3) 年 (13 歳) 「子供の会」の会員が、組合基督教会の会員として移る。
県立図書館で英語の修得に励む。
- 1918 (大正 7) 年 (17 歳) 「方言罰札」制度に抵抗し、中学校を落第する。
- 1920 (大正 9) 年 (19 歳) 伊波の推薦によって仲西小学校の代用教員に採用される。
- 1923 (大正 12) 年 (22 歳) 上京して郵政省貯金局外国為替課に就職する。
- 1924 (大正 13) 年 (23 歳) 外国為替課で人員整理によって希望退職する。
東京外国語学校英語科の編入試験を受けて入学する。
- 1926 (大正 15) 年 (25 歳) 東京外国語学校を卒業して、大橋図書館司書となる。
「南島談話会」が発足し、比嘉春潮とともに会務を引き受ける。
- 1928 (昭和 3) 年 (27 歳) 『旅と伝説』誌の付録として『南島談話』誌が創刊され、創刊の辞を書く。
- 1930 (昭和 5) 年 (29 歳) 大橋図書館を辞職する。
- 1931 (昭和 6) 年 (30 歳) 「南島談話会」の幹事を比嘉春潮とともにつとめ、機関誌の編集を手がける。
- 1933 (昭和 8) 年 (32 歳) 『南島談話』が『島』誌に発展的に解消される。
考古学人類学民族学雑誌『ドルメン』(岡茂雄主宰)の編集者になる。
- 1934 (昭和 9) 年 (33 歳) 『ドルメン』は経営困難で廃刊となる。
柳田国男主催の「木曜会」に参加する。
- 1935 (昭和 10) 年 (34 歳) 「民俗伝承の会」が発足し、機関誌『民俗伝承』が発刊される。
『民族学研究』誌が発刊される。
- 1936 (昭和 11) 年 (35 歳) 金田一春彦ら東京大学と国学院大学の学生に請われて、自宅で琉球語のアクセントについて教授する。
アイヌ調査のために、金田一京助にしたがい、樺太・北海道に取材旅行をする。
- 1937 (昭和 12) 年 (36 歳) 金田一京助の紹介で三省堂に入社し、辞書編纂にあたる。
- 1939 (昭和 14) 年 (38 歳) 父親危篤の知らせで沖縄に帰る。この時が最後の訪沖となる。

る。

1940（昭和15）年（39歳） 比嘉春潮、仲吉良光、比屋根安定、八幡一郎、石川正通、島袋盛敏とともに、「七星会」を結成する。

1946（昭和21）年（45歳） 三省堂を退職する。

米軍総司令部民事検閲部の高級翻訳官となる。

1947（昭和22）年（46歳） 沖縄人連盟のなかに「沖縄文化協会」（宮良当社会長）が設立される。

仲原善忠を中心に「おもろ研究会」が開かれる。

1948（昭和23）年（47歳） 沖縄文化協会とおもろ研究会が合併して、独立研究機関として「沖縄文化協会」が発足し、『沖縄文化』誌を刊行する。

1949（昭和24）年（48歳） 翻訳官を辞職して、東京学芸大学において渉外の仕事に従事する。

なお本稿の引用文には、不適切な表現が含まれている部分があるが、史実を重視する立場から、あえて訂正を加えていない。さらに引用文中の句読点については、読みやすくするために一部、筆者が付け加えた部分がある。

2 伊波普猷の影響

金城は9歳の頃、伊波が自宅で開いた「子供の会」に入り、すでに幼少の頃から伊波の影響を受けることになる。中学の時には、伊波らとともに日本組合基督教会沖縄支部に入会している。この沖縄支部は1916（大正5）年に、比嘉静観（1887-1985）牧師が伊波らとともに結成したものであった。そこで金城は聖書を講じる伊波の薫陶を直接受けた。それと同時に、伊波が館長をしていた沖縄県立図書館に足繁く通い、日本文学のみでなく、外国文学、とくに聖書を英文で読むなど、英語を精力的に学んでいる。とくに沖縄の組合基督教会はキリストの人間性を説き、教会と教義よりも倫理運動に重きをおくユニテリアンとよばれた宗教運動に近かった。そのために自由主義的な傾向を帯びた革新的な知識青年が結集していた。

当時、伊波の周辺には真境名安興（1875-1933、以下は真境名）、比嘉春潮（1883-1977、以下は比嘉）、俳人の末吉麦門冬（1886-1924）が集まり、さらに作家の新垣美登子（1901-1996）、そして後に従弟の金城と結婚することになる知念芳子（1901-1991、以下は芳子）らの女性陣も加わり、あたかも沖縄の文芸復興の様相を呈していた。伊波を囲む集まりは新思潮の集積地ともなり、社会主義グループなどもそこから分岐した⁴⁾。

この頃、伊波は沖縄の青年の精神的な自立を訴え、講演会などの精力的な啓蒙運動を行っていた。1914（大正3）年に伊波は、

近来沖縄青年の一部に、自己に対し、父兄に対し、先輩に対し、社会に対し、反抗的精神の高調しつつあるは、これやがて彼等が自己解放を要求する内心の叫びに外ならない。これはむしろ喜ぶべき現象である。願はくば沖縄青年の心から自己生存の為に金力や権力の前に容易く膝を屈して、全民族を犠牲に供して顧みないような奴隷根性を取去りたい。この根性を取去るのでなければ、沖縄県人は近き将来に於て今一度悲しむべき運命…奴隷的生活…に陥るであろう。而して之に次ぐものは社会の滅亡である。世に社会の滅亡ほど悲しむ可きものはない⁵⁾。

伊波は「琉球処分」(明治政府が琉球王国を日本に強制的に統合した一連の政治過程)によって、琉球人は奴隷的境遇から解放されたかもしれないが、精神的な自立は未だ達成していないと考えている。そこで沖縄の青年が主体性をもって、精神的な「内なる奴隷」の状態から自立すべきであると訴える。金城は10代であったとはいえ、多感な時期に、伊波の訴えが心底に深く刻まれたのは想像に難くない。

金城は当時の伊波の影響を強く受けることになる。それが顕著に現れたのが、標準語教育に対する批判である。皇民化教育の施策としての標準語教育に対して、地方蔑視の動向を内在するものであると批判する。おそらくこの問題意識は当然のように言語についての関心へとつながっていく。金城が後に琉球方言に関心をもち、著書『那覇方言概説』(三省堂、1944年)を刊行するきっかけとなったのは、この辺りにあったといえる。

金城は旧制中学校では成績優秀で月謝免除の恩典に浴していた。当時の沖縄の中学校や小学校では、方言を使った生徒の首に方言札という罰札をかけて、その生徒をみなの前でさらしものにしたほか、操行点を減点するという強硬手段に訴えて、方言撲滅運動が進められていた。金城はこの「方言罰札」制度に抵抗して、方言札をひとり占めする。金城は「沖縄人が沖縄語を使って何が悪いんだ」と、故意に方言を使って、全校の罰札をひとり占めにして抵抗したために、落第生となる。その後、沖縄を去って1923(大正12)年に上京し、東京外国語学校で学び始める。方言罰札の制度のほうは1917(大正6)年から1919(大正8)年初め頃まで、沖縄県立第一中学校で行なわれたが、結局、最後は不評を買って廃止されている。

金城の反骨精神は、その後の人生を大きく左右する。『全集』の刊行に際して、沖縄タイムス社の論説委員であった由井晶子(1933、以下は由井)は、金城の人柄や研究姿勢を書きとどめている。由井は、

金城氏の著作は楽天的で明るいのが基調だが、その底の底には、なにものかに対する怒りが流れている。それはめったにナマの叫びや怒声、うらみごとという形で表現されることはない。あるときは、言語にしろ、民俗にしろ、沖縄の特異な現象が、なぜかのごとき姿であるのか、日本各地や外国の場合とも比較対照し、その由来をねばっこく追求して人

びとにさし示す方向に向う。あるときは、とかく沖縄の日本化、近代化のなかで卑しめられ、否定されがちだった最下層の庶民文化に限りない愛情を示す形で表される。しかし、ひとたび権威に頼ってものをいう徒輩があらわれると、痛烈な皮肉で、猛然とからむ。本書はそうした著作の集大成である（『沖縄タイムス』、1974年2月23日付）。

と評している。金城は権威に対する盲従、時代の風潮に対する事大主義的な迎合などを、最も嫌ったようである。この金城の特質は終生貫かれ、それは多くの論考に反映される。

金城の伊波に関する評価については、

伊波先生の強みとでもいえるのは、琉球人自身の感覚で、自らの祖先の精神文化を探るという有利な地位にあったことで、事実、また後年、先生の業績は、前人の到達し得なかった領野の開拓に幾多の成果を挙げて、これを証明している。先生の学界への登場により、従来の琉球研究の中心が移り変わり、この主権を琉球人自身の手の中に収め得たことは、この学問の一大転換期を示すもので、この意味において、明治四十四年に出版された『古琉球』こそは、日本民俗学における柳田先生の、やはり明治四十年代刊行の『石神問答』にも比すべく、琉球研究史上、一つの新たな時代を画するものとして永く斯界の人たちに記憶せらるべきものであらう⁶⁾。

としている。伊波によって琉球人自身の感覚で、祖先の精神文化を探ることがなされたとしている。この意味で金城の考える「琉球学」が始まったという。

そして金城によれば、伊波と同様の意味で、沖縄の言語、民俗、宗教などの分野において、多くの業績をあげている代表的な学者は、真境名と東恩納寛惇（1882-1963、以下は東恩納）であった。伊波を含めたこの3名は、沖縄研究の主導権を沖縄人自身の手の中に収めることに貢献したという⁷⁾。真境名は沖縄文化史研究に、東恩納は沖縄史の実証的研究に多大な足跡を残している⁸⁾。その後、中央では柳田国男（1875-1962、以下は柳田）、折口信夫（1887-1953、以下は折口）、柳宗悦（1889-1961、以下は柳）らの民俗学を中心とする人びとが、そして沖縄の地元では伊波を中心とする人びとが、相呼応して沖縄文化の価値を賞揚して、本土との同一性を主張した。

3 琉球語と民俗学

金城は1920（大正9）年3月に中学校を卒業し、その後、沖縄県内での伊波の講演に同行して、各地域の学校を巡廻していた。そして伊波の推薦で仲西小学校の代用教員として採用される。1923（大正12）年3月には上京して郵政省貯金局外国為替課に就職する。すでに代用教

員の時に上京を考えていたようで、旅費などの準備をしていたようである。同年9月に関東大震災で被災するが、沖縄には帰郷しなかった。しかし翌24（大正13）年に外国為替課の人員整理の際に、希望退職をしている。その後、東京外国語学校英語科への編入試験を受け、外国語学校の学生となっている。

伊波のほうは1924（大正13）年12月に沖縄県立図書館長職を辞し、翌25（大正14）年2月に校訂作業を終えた『おもしろさうし』を携えて上京する。伊波は柳田にオモロ研究を促されて、研究者として再出発する。同年、金城は従弟の芳子と結婚して、伊波と隣り合わせで住むことになる。金城は1926（大正15）年に東京外国語学校を卒業し、伊波の紹介で岡村千秋（柳田の縁故者で『郷土研究』誌の主筆）に頼み、大橋図書館（大橋進太郎博文館長の経営）の司書となっている。ほぼ同時期に民俗学者の大藤時彦（1902-1990、以下は大藤）も司書になり、親密な交流が始まっている。もっとも前述のように1930（昭和5）年には図書分類について大橋館長と意見が衝突し、わずか4年足らずで大橋図書館を辞職している。

伊波の上京をきっかけにして、沖縄民俗学研究がさかんとなり、柳田、伊波、そして折口らを中心とする「南島談話会」が1926（大正15）年に発足する。沖縄談話会ないし琉球談話会という名称ではなかった。柳田は沖縄や琉球という名称は、政治色に染まっていると判断したようである。そこでその名称を避け、さらに奄美群島を包括するという意味も込めて、価値中立的で文化的なイメージをもった用語として「南島」という名称を選んだ⁹⁾。伊波もこの柳田の影響を受け、南島という用語を使用し始めている。

機関誌の『南島談話』は、すでに発行されていた『旅と伝説』誌の付録の形で、1928（昭和3）年に創刊される。南島談話会は東京朝日新聞社内に置かれ、金城は比嘉とともに、その会務を引き受けている。それと同時にこれら先学の学問を学んだといえる。というのは、金城は生涯にわたって経済的には恵まれなかったものの、研究会の世話をすることによって、伊波をはじめ柳田、折口、東恩納、比嘉、仲原善忠（1890-1964、以下は仲原）らの知己を得たので、研究環境としては恵まれていたといえるからである。金城は生活難で、芳子が借家で素人下宿業を営みながら、保険の外交、写真技師の助手、家政婦、焼き鳥売りなど、さまざまな仕事をして糊口をしのいだとされる¹⁰⁾。

この生活苦のなかで1927（昭和2）年頃から、『沖縄教育』誌、『民族』誌、『旅と伝説』誌に論文や随筆を発表し始めている。たとえば『沖縄教育』誌（第166号、1927年）には「チェンバレン「琉球語文典」序論（訳）」、『民族』誌（第3巻3号、1928年）には「琉球児童語彙」、『旅と伝説』誌（第2巻12号、1929年）には「琉球方言の比喩法」などを発表しているように、琉球方言に関するものが中心であった。

金城が方言に関心をもつきっかけは、前述のように政治的社会的背景をもっていた。したがって金城の方言研究には政治的社会的背景が色濃くみられる。そして沖縄研究を始めた当初、金城自身が最も力を傾けたのは、方言研究であった。その研究成果が『那覇方言概説』

(1944 年) にまとめられる。その緒言で、

一部世人の間にはややもすれば琉球語と支那語とを結びつけて考えたがる風景が、いまだに遺っている。少し気をつけてみると、これにも琉球語は日本語と支那語とが混淆して出来上がった言葉ではなかろうかという多少念の入った見方と、ただ漠然と支那語の一種かも知れないという、至って手輕な考え方との二つに分かれている。もちろん、そのいずれも取り上げて論ずるに値しない俗説に過ぎないけれども、琉球語に関してかような誤解が生じたことには、またそれ相応な理由がないわけではなかった。その主たる原因の一つは、歴史の上で琉球が特殊な国情を有していたことによる。(中略) 琉球語に関する日支両語混淆説と支那方言説とでもいうべきものが、前者は日支両属の政治的關係から推測された誤謬であり、後者は琉球王国が支那皇帝の冊封を受け、その属国めいていたのを重く見て想像した素人考えに過ぎず、琉球語そのものについて、言語学的に音韻・語彙・語法などを、支那語と比較研究した上で唱えられた説でないことは明らかである¹¹⁾。

としている。

金城によれば、琉球方言はチェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) によって最初に提唱された日本語の姉妹語説以来、日本語と同じ系統に属する言語であることは、もはや自明である。姉妹語か方言かという論争は、その後に起こったにしても、琉球語と日本語との同祖説は通説として定着している。問題はそれ以後である。金城は今や琉球方言の研究は、沖縄の島々の出身者に負わされた、国語学界に対する一種の義務であるとする。しかしその義務を果たすための方法論が、検討されていない。外国語の文法範疇を適用し、標準語的なものへの憧憬によって、伊波以来の関連付けをするか、あるいはそれに引きずられて研究が行なわれている点に問題がある。すなわち同祖の強調が見落としがちな「差異」を欠落させてしまう可能性をもっている。もっとも差異による方法の展開が弱かったという点は、金城自身に対してもあてはまることでもあった¹²⁾。

日本語と琉球語の関連については、言語学の服部四郎 (1908-1995, 以下は服部) も著書『日本語の系統』(岩波書店, 1999 年) において、その関連は動かし難いと説明している。たとえば共通語の母音 i・e 両方が首里方言では i になり、u・o 両方が首里方言では u になっている (狭母音化)。また共通語の ki に対して、首里方言では chi で現れる (歴史的口蓋化)。そういった規則的な音対応をなしていることから、「日本語」と「琉球語」との間の親族関係は動かし難いといってよいと説明している¹³⁾。

金城によれば琉球方言の展開は、本土方言と基層的には共通するものを有しながら、14 世紀以降の明国、清国などとの交流で、語彙の面で中国大陆の影響を受け、17 世紀以後の薩摩藩の統治によって、本土の言語文化を受容している。さらに東シナ海の縁に位置して、隔て合

う島嶼群から構成されるという地理的条件の下、アジア諸地域との交易システムを構築するといった独特の歴史過程を歩むなかで、特異な性質を有するに至っている。これは民俗の場合も同様である¹⁴⁾。民俗学も同様の特質を有している。したがって、いわゆる本土の民俗と琉球列島の民俗との対比や類比を通して抽出できる特徴を体系化し、その際に地理的背景および歴史的背景を考慮しなければならないということになる。

金城の言語学関係の論文のなかでは、「沖縄語」ではなく「琉球語」と呼ぶべきであると繰り返し強調している。これは沖縄学ではなく琉球学でなければならないという金城の意志に照応するものであった。琉球学でなければ、それが本来志向すべき内容をそなえて、その対象を全体的に表現することはできない。そしてそれを明確にしない限り、対象の全体を正確にみることはできないとする。

沖縄語ないし琉球語に関しては、1940（昭和15）年に沖縄県学務部が「標準語奨励県民運動」を展開していたことを、民芸運動を展開していた柳らが批判して、1年におよぶ「方言論争」となった。柳の主張は「沖縄が日本の古語を数多く保有する随一の地方語」であるので、「県庁は率先して県民に沖縄語が日本語の最も価値ある地方語であるという誇りを与えねばならぬ」として、「国民精神の振興は地方文化の否定を伴ってはならぬ」¹⁵⁾ というものであった。しかし柳らにはウチナーグチは単一ではなく、地域や島々によって異なるという認識はなかった。

沖縄県学務部は柳に対する反論を地元紙に発表する。「ソテツ地獄」以来、本土や海外にわたった沖縄人が標準語を話さないために差別されているので、日本との「同化」をめざすことは沖縄県民の苦境を脱する方策であるとした。両者の論点は整理されないまま、方言論争となったが、沖縄県学務部の反発の根には、柳らの本土知識人の優越的な態度への嫌悪感があったことは否めない¹⁶⁾。柳は沖縄のことはあまり知られていないとした上で、「沖縄に於いてはほど古い日本をよく保存している地方を見出すことは出来ません。粗忽にも沖縄を台湾の蕃地の続きの如く思ってはなりません」と記している。さらに、

人々は今迄余りにも暗い沖縄を語り過ぎてゐたのです。私達は優れた沖縄を語りたいのです。それは私達を明るくし島の人々を明るくさせるでせう。私達は実に多くの富に就て語り合ひたいのです。沖縄に就て嘆く人々の為に、又此の島に就て誤つた考へを抱く人々の為に、又自国を余りにも卑下して考へる土地の人々の為に、さうして真理を愛する凡ての人々の為に、此の一文が役立つことを望んで止まないのです¹⁷⁾。

と語る。これらの言葉は柳の偽らざる本心を語ったものである。しかしこの発言は私たちこそが優れた沖縄を語ることができるという柳の高慢な雰囲気 が漂い、「貴族的趣味」さえも感じさせるものであった。

金城は1930(昭和5)年に大橋図書館を退職後、『犯罪科学』誌に毎号寄稿して、その原稿料を生活費に充てている。この連載記事は、後にまとめられて『異態習俗考』(1933年)という著書になっている。この頃から方言ばかりではなく、民俗に関する論考も多くなり、それを『南島談話』誌に発表している。それと同時に『南島談話』誌の編集も引き受けるようになる。ところが1933(昭和8)年に比嘉が、それまで勤めていた改造社を辞め、柳田とともに雑誌『島』を発刊することになり、それによって『南島談話』誌は発展的に解消される。

1934(昭和9)年から、金城は柳田の主宰する「木曜会」に参加している。木曜会の前身は、前年の1933(昭和8)年に柳田が成城の自宅で、毎週木曜日に「民間伝承論」について12回にわたって講義をしていたものであった。木曜会は柳田を囲んで比嘉や金城をはじめ、大藤、和歌森太郎(1915-1977)、関敬吾(1899-1990)、最上孝敬(1899-1983)ら6~7名のメンバーで開催された。木曜会では島々の民俗だけでなく、広く全国の農山漁村を対象に民俗研究が行なわれた。このとき金城は山村調査ということで信州に赴いている。

さらに1935(昭和10)年に日本青年会館で「柳田国男先生還暦記念民俗学講習会」が開催されている。その世話役をつとめたのは、伊波、比嘉、そして金城であった。柳田民俗学の形成や展開にとって、この3人は欠かせない存在となっていた。この講習会をきっかけにして同年「民俗伝承の会」が発足し、機関誌『民俗伝承』が発刊される。これは戦後、1947(昭和22)年に民俗学研究所として再出発することになるが、現在に至る日本民俗学会のルーツとなるものであった。

『民俗伝承』誌と同時期に『民族学研究』誌が発刊され、金城は戦後になってからであるが、「伊波普猷先生の生涯とその琉球学」(第13巻1号、1948年)、「沖縄研究史—沖縄研究の人とその業績」(第15巻2号、1950年)、「沖縄関係図書目録」(第15巻2号、1950年)などを発表し、徐々に沖縄に関する民俗学というよりも琉球学の構想をもつようになる。また『民族学研究』誌において「米国における沖縄研究」(第13巻4号、1949年)や月刊『おきなわ』において「沖縄現代史序説」(第18号、1952年)、「最近の沖縄研究の傾向と情勢—琉球研究史の一節」(第4巻2号、1953年)、「沖縄の歴史と文化」(第4巻8号、1953年)、「沖縄に関する文献—歴史・地誌に就いて」(第4巻8号、1953年)など沖縄研究の動向を明らかにしようとした論考が発表されている。

1936(昭和11)年に金城は、金田一春彦(1913-2004)ら東京大学と国学院大学の学生(約10名)に請われて、自宅で半年間にわたって琉球語のアクセントについて教授する。そして請われるままに金田一京助(1882-1971)のアイヌ調査の助手として、樺太・北海道の取材旅行に赴いている。金城は金田一京助との縁で、翌37(昭和12)年に三省堂に入社し、辞書編集に携わっている。それまで『南島談話』『旅と伝説』『ドルメン』などの雑誌の編集を担当した経験が活かされる。それと同時に金田一春彦らに対して行なった講義をまとめて、三省堂から『那覇方言概説』(1944年)を出版している。

一方、沖縄研究の高まりとともに、在京沖縄県人は東京、関西、台湾、沖縄などで沖縄県人のネットワークを築き、情報の共有化を図ろうとしていた。沖縄に関する情報、たとえば沖縄県下の米配給制度の実態、島袋全発（1888-1953）の図書館長辞任問題、方言論争の影響などの情報を、ネットワークを生かして交換しようとしていた。そして1939（昭和14）年に金城は比嘉ら9名のメンバーで「ナインクラブ」を結成し、沖縄の新聞へ「日曜通信」を送り始める。翌40（昭和15）年には、これをさらに発展させて、沖縄研究を目的として、金城や比嘉ら7名のメンバーで「七星会」を結成している。この会は沖縄に関する情報交換の発信元あるいは受け皿となっていく¹⁸⁾。

これらの活動から金城は自身の研究業績ばかりでなく、他の研究者を支えたということができる。金城はこの面でも優れた業績をあげている。戦後になるが、沖縄県出身の作曲家である金井喜久子（1906-1986）の著書『琉球の民謡』（音楽之友社、1954年）において、「琉球民謡の起源と変遷」「琉球民謡歌詞解説」などの長文の歌謡解説を付けながらも、その共著者として、著書に名を連ねることはなかった¹⁹⁾。しかも金城はこの仕事をきっかけに体調を崩している。さらに金田一博士古稀記念論文集刊行会編『言語民俗論叢：金田一博士古稀記念』（三省堂、1953年）や市河三喜・高津春繁共編『研究社世界言語概説（上）（下）』（研究社辞書部、1952-55年）のなかで、「沖縄」の項を担当している。

4 沖縄学と琉球学

金城の研究対象を戦前と戦後で、大まかに分けるとすれば、戦前は方言に関する研究であり、戦後は歴史に関心をもち、その研究が中心となって、研究対象が徐々に移っていく。そして金城はその大きな転換に関して、

今度の敗戦の結果、戦災孤児として国際場裏に投げ出された沖縄は、あたかも日本という貧しい親の棄て子の親を呈している。お金持ちの小父さんにも譬うべき米国が、これを里子として貰い受け育て上げてくれるかどうかは、もっぱら学問向上の沖縄研究に携る学徒の取扱う領域外に属する問題ではあるが、私共はこの哀れな浮浪児を拾い上げて、里子として養ってくれる里親に対して、この孤児の将来のために、せめて一通りの正しい血統書を添えて、その出自と来歴を出来得だけくわしく、そして誤りのないように知らせ伝える親切心はあってもよからうと思う。日本政府は、沖縄研究の学徒に、その役割を立派に成し遂げるよう、乏しいながらも応分の助力は致すべきであろう²⁰⁾。

と語っている。研究対象を言語から歴史に移したのは、金城の親切心からであるという。今後の沖縄を考える場合に、その歴史的背景を明確にしておかなければならないとする沖縄研究者

の使命のようなものを感じたのであろう。

その際、金城が繰り返し著作のなかで扱うことになるのが、「日支両属」という沖縄が過去に背負った大きな問題であった。金城は沖縄では長きにわたって親日派と親支派の闘いが続いていたことを記している。そして、

沖縄人の主体が遠い昔に手を別ったいわゆる大和民族の子孫であることは、最近に至るまでの各方面の学者の認めている通りに違ひなかりうが、さて、沖縄に上陸してみると、一見、人も事物も余りに日本本土とは異なっているのに驚かざるを得ない。日支両属の変態的な国際情勢の下に永年暮してきた沖縄人自身も、その大多数の者は、自分たちが、一体何者であるか、漠然として、その真の姿を見失っているといった状態であった²¹⁾。

と説明する。日支両属の下で真の姿を見失ってしまった歴史が、今また戦後の「日米両属」によって形を変えて繰り返すことになれば、悲劇が拡大するだけであると訴える。

金城は極端ともいえる「同化論」を展開している。「沖縄人は日本人であります。日本人である沖縄人は、本来の日本人としての自覚のもとに日本人としての生活を続けて行く事が、最も望ましく、また正しいことを、前代の沖縄の歴史が教えているからであります」²²⁾と主張する。これは両属の悲劇を繰り返してはならないという感情の裏返しである。金城は「無理な制度の圧迫は、裏には反抗心を抱かせ、表には卑屈な態度をとらせるようです」²³⁾と分析している。しかしここではあえて「同化」という用語を使っている。同化に対して不合理の感じを抱く人があるかもしれないと断ったうえで、その理由を歴史における、

島津氏の政策のために、支那人でもない、また日本人でもない特別な人種でもあるかのごとき印象を与える「琉球人」という呼び名が、沖縄人に対して広く用いられている。(中略)そしてまた日本人である沖縄人自身もいつの間にか、自分たちの出自を忘れて、日本人としての自覚を失っていたものが、現代の初期の明治維新頃までは多かった。(中略)これらの日本人意識を持っていないいわゆる「琉球人」たちを、仮に異質なものと見なして、この人たちが日本人である沖縄人に立ち帰り、そして日本人としての自覚を抱くようになる過程を指して同化と言ったわけであります²⁴⁾。

と説明する。

ここには沖縄がアメリカの統治領になってしまうという危機感がある。終戦後の沖縄をめぐる政治的問題が長引けば長引くほど、沖縄人は「真の姿を見失って」しまうことになる。それを何とかい止めるとすれば、政治経済的な方法ではなく、精神的なあり方を探る以外に方法はないと強調している。金城は「明治初期の琉球関係の著述が啓蒙的であり、日本に向って、

そして沖縄人に対して、内外共に日琉同祖を各方面から説き聞かせることに多くの努力が払われているのも、無理からぬことであった²⁵⁾として、自ら納得するかのように、かつての歴史を振り返っている。まさに「明治初期」を「終戦後」に置き換えれば、当時の金城の思いと重なる。

しかし「明治初期」と「終戦後」とでは、その時代的な背景も異なり、大きな差異が生じている。それは「沖縄文化の中の非日本的な異質の諸文化」であった。里子に出された孤児が、真の血統書を携えて歩けるのは、これを意識することであった。非日本的な異質を意識することによって、孤児は自立を探ることができる。金城がもち続けた問題は、「両属」の歴史問題であり、そのなかでどのようにして沖縄人のアイデンティティーを確立していくかという問題であった。

金城は1948（昭和23）年の『沖縄文化』誌に連載された「琉球に取材した文学」という論考のなかで、服部による「日本語と琉球語・朝鮮語・アルタイ語との親族関係」（『民族学研究』第13巻2号、1948年）という論文を取り上げている。服部はこの論文の補注において「私が「琉球語」といふ名称を使ふ決心をした大きな理由は、琉球人自身が日本から独立を欲してゐることを、金城朝永氏より知ったからである」と記している。金城はこの文中の「琉球人自身が日本から独立を欲してゐる」という部分を、「現地の沖縄人の中には、再び日本の侵略的な、帝国主義的政策による半植民地扱いの支配下に復帰するよりも、むしろ、より自由な民主主義の米国の信託統治を望む者もいるらしく」と改めてもらいたいと語る²⁶⁾。これでは金城自身が反日派であるような印象を与えかねないという理由であった。

過去の沖縄帰属問題では「唐代」^{トユー}「大和代」^{ヤマトユー}「ウランダ代」^{ユー}という言葉が使われている。それは、

島民の間では、沖縄が未だ近接の大国、支那や日本の支配下に置かれず。自らの手によって島々を治めていた黄金時代を、「沖縄代」と称し、自ら進んで支那の冊封を受けた世を「唐代」と唱え、伝説に見えている為朝の一時的征服や、島津氏に隷属するに至った慶長役や、これに次ぐ明治政府の版図に編入された以降を「大和代」と呼び慣わしている²⁷⁾。

これらの言葉こそ沖縄の一面の姿を映し出している。金城は、

沖縄帰属問題の最後の決定は、もちろん、講和会議の開催をまたねばならぬが、現下の情勢は、たしかにこの島が、国際上、これまでとは全く異なった政治的地位に編入されることを予想せしめるものが多く、土地の一部の人々の間では、米国占領下の終戦後の沖縄における軍政こそは「ウランダ・ユー」の始まりだと称え、既にこの新たな世代ともいふべき歴史的段階に一步を踏み出していると、公にこれを説いている者もいるらしい。この

「ウランダ・ユー」（和蘭世・紅毛人支配下の治世）という巧妙な表現は、慶長の薩摩の琉球入り後の島津氏支配下に対して古くから呼び慣わしている「大和世」^{ヤマトウユウ}という俗称に倣って造り出された新語である。琉球の歴史についてみると、前代の自治のいわゆる「沖縄世」ともいべき黄金時代に次ぐ、この「大和世」への移り変り目の慶長年間の薩軍の琉球征伐は、あるいは今次の沖縄戦にくらべてよい大事件であった²⁸⁾。

と語る。沖縄の帰属問題は混迷しているが、過去の経緯から、どのようなあり方が好ましいのか熟考する必要がある。その際に依拠すべき点は、沖縄とは何か、琉球とは何かである。つまり沖縄学なり琉球学なりの確立が望まれている。

ところで「沖縄学」という言葉は、前述のように、いつ頃から誰によって使い出されたのかは明らかでない。外間によると、それを最初に使い出したのは金城であるという。外間は「最初に『沖縄学』という呼び方を使いだした金城朝永さんなどは、前述した『日本学』に準ずるくらいの気持で、しかも研究者の立場からではなく、沖縄研究のトータルなものとしての使い方だったようである」²⁹⁾と語る。もっとも金城は沖縄学よりも、「琉球学」という言葉を好んで使った。金城の論考のなかでは、すでに「おもろ研究前史―田島利三郎先生評伝」（1937年）において、「現今のごとく多様多岐に学問が分化していて、それぞれの部門に携ることによって、ある程度まで物質生活が保証されている時代でさえも「琉球学」は未だに恵まれていないのが現状であります」³⁰⁾とされ、これが最初に用いられた箇所である。そして「伊波普猷先生の生涯とその琉球学」（1948年）が、「琉球学」という言葉が使われた最後の論考となっている。

その後、金城が使った琉球学という用語は、他の人によってあまり用いられることもなく消えてしまう。その代わりに沖縄学という用語が定着していく。琉球学ではなく沖縄学が定着したのは、比較的新しいことになる。沖縄学という用語が定着したのは、伊波の顕彰碑が建立された時点を、ひとつの画期とみなすことができる³¹⁾。1961（昭和36）年8月に建立されたその碑文には「おもろと沖縄学の父」と刻まれた。それ以後、沖縄学という用語は急速に一般化し、伊波のイメージと重ね合わされて浸透していく。

金城は琉球学に関する自身の考えを、

西欧における『埃及学』（Egyptology）のごとく、将来、「琉球学」（Ryukyulogy）とでも称すべき学問が、もし成立するとしたならば、これを集大成した最初の貢献者の荣誉は、必ずや伊波先生の名に値するに相違なからう。ここでわざわざ先生を、この学問における集大成の第一人者として挙げるに止め、敢て創始者と呼ばなかったのは、既に先生の前に、琉球の研究に着手した篤学な数名の先駆者たちがあったことも、決して忘れてはならないからである³²⁾。

としている。金城は琉球学の先駆者として伊波をあげる。さらに続けて、琉球研究の先駆的な業績について、

江戸期における『南島志』の新井白石、『琉球談』の森島中良や、支那歴代の冊封使、特に『使琉球録』の陳侃、『中山伝言録』の徐葆光は別として、維新後の『琉球新誌』の大槻文彦、『沖縄志略』の伊知地貞馨、『南島沿革史論』の幣原坦、『南島探験』の笹森儀助や、琉球諸島の結縄文字の最初の紹介者田代安定の諸氏の外に、琉球語の最初の組織的文典と語彙を編纂した英人チェンバレン氏など、それぞれ、琉球研究の代表的な業績を遺しているのみならず、なかんずく、先生の中学時代の恩師で「おもろさうし」の発見者で直接先生の「オモロ」研究に土台石を据えつけた草分けとも称すべき田島利三郎氏の名は、後年、先生のこの方面における声価が余りにも高くなったがために、とかくその蔭にかくれがちで、一般の人には知られていない憾があるが、この田島氏と伊波先生との交渉は、他日琉球学史が編まれる場合、国学における賀茂真淵翁と本居宣長大人との関係にも比すべきものとして、特筆大書するに価する事柄であろう³³⁾。

と説明する。琉球研究の代表的な学者と著書を列举して、後日、琉球学史ができる可能性もほのめかしている。

金城の掲げる先駆的な業績を残した人には、沖縄出身者ばかりでなく、日本本土出身者や外国人も含まれている。金城の想定する琉球学は、対象を琉球にした研究を総称する名辞であり、少なくとも研究者の出自にはとらわれていない。この点では学問領域の広がりをもっていたといえる。しかしながら金城が理想とする琉球学は、このような学問領域の広がりだけを説いたものではなかった。金城は、

もし、ある国の事物に対する研究が旅人の見聞に始まり、次に滞留者の観察を経て、最もぞましいことが、その郷土人による郷土文化の探究をその理想とするならば、琉球人である伊波先生が、それまで郷土人以外の手によって行われていた琉球研究へ自ら参加したことは、画竜点睛とでも称してよからう³⁴⁾。

と語る。金城によれば、伊波は琉球人自身の感覚で、自らの祖先の精神文化を探っていたのであり、それは画期的な出来事であったと評価している。琉球研究は県外者によって推進される部分もあるが、郷土人が着手することが最もぞましいことであるとする。金城には琉球学の担い手という点で曖昧な点があったことは否めない。この点で、一般的に沖縄学の概念規定においては、研究者を沖縄出身者に限定してしまう排他性が入り込みやすいという傾向がある。それに警鐘を鳴らすのは、外間らである。沖縄学の概念のなかに、金城の琉球学的広がりを含ま

せ、発展的にその可能性を追求することを提起している³⁵⁾。

金城は終戦直後に生まれた沖縄人連盟総本部の主導者のひとりで、伊波、比嘉、仲原、^{みやなが}宮良^{まさもり}当壮（1893-1964）らとともに、文化局（沖縄文化協会）の世話役を引き受けている³⁶⁾。連盟結成初期の頃、沖縄独立論の渦中で、金城も独立論に傾いたようである。沖縄文化協会は1948（昭和23）年に設立されて、比嘉の編集による機関誌『沖縄文化』が創刊されている。仲原会長による巻頭言には「祖先の文化的能力・業績を闡明し、内外人の認識を求めるとともに、沖縄人の能力にたいする正確なる展望的資料を提出したい」と書かれている。戦後の琉球および沖縄の研究に取り組む決意が込められた協会設立であった。沖縄文化協会には在京沖縄人がつどい、活発な研究会がひらかれ、『沖縄文化』誌上において多彩な論考が発表されている。

一方、沖縄の統治機構については、アメリカはすでに1945（昭和20）年3月に「軍政府」を設立し、沖縄占領と同時に日本の行政権停止を宣言している。1950（昭和25）年12月に軍政府が廃止され「米国民政府」となり、強大な権限をもって長期にわたって統治することになる。そして1952（昭和27）年4月に「対日講和条約」および「日米安全保障条約」が発効し、北緯29度以南の奄美や沖縄と日本の行政分離が国際的に決定される。

統治機構とともに沖縄の自治機構も組織された。1945（昭和20）年8月15日に米軍政府は各地の収容所から住民代表を集め、米軍政府と沖縄住民との意思疎通をはかる諮問機関の設立にとりかかる。住民代表から15人の委員が選出され、5日後に「沖縄諮詢会」が発足する。その後、沖縄住民の自治機構は「沖縄民政府」（1946年4月設立）、「琉球政府」（1952年4月設立）と変遷しながら、本土復帰まで存続する。住民自治機構といっても、日本の一般的な地方公共団体とは異なり、米軍統治機構の下に位置付けられ、占領者と被占領者の関係が大前提となっていた。住民機構の代表者は米軍が任命し、琉球政府行政主席の公選が実施されたのは、ようやく1968（昭和43）年11月の本土復帰（1972年）を3年半後に控えた時期になってからであった。

米軍統治が進展をみせる一方で、米軍政府は沖縄政策の一環として、沖縄伝統文化を奨励し支持した。戦中に米海軍省作戦本部が発行した『民事ハンドブック』では、沖縄住民は独自の文化をもち、それを誇りとしていると分析されていた。さらに1947（昭和22）年6月にGHQのマッカーサー（Douglas MacArthur, 1880-1964）は「沖縄諸島はわれわれの天然の国境である。米国が沖縄を保有することにつき、日本人の反対があるとは思えない。なぜなら沖縄人は日本人ではなく、また日本人は闘いを放棄したからである」と語っている。つまりアメリカによる沖縄政策の根底にあるのは「沖縄人は日本人ではない」という認識であった³⁷⁾。この認識に基づいて、戦前期に日本が施した皇民化教育の呪縛から沖縄人を解放するという意図があった。この意図にしたがって、沖縄を日本から切り離した「離日政策」とよばれる教育文化政策が強力に推進されることになる³⁸⁾。

このような状況のなかで、琉球学および沖縄学は翻弄される。つまり沖縄の独自性を強調す

ることは、アメリカの沖縄政策にとっては、むしろ好都合なことであった。したがって金城の琉球学はこれに抵抗する意味をもつことになる。金城の場合は、琉球語は日本語と同じ系統に属する言語であり、沖縄人は日本人であるという前提に立って、琉球学の可能性を模索していたからである。言い換えれば、日本における沖縄の独自性の強調である。もっともこれは日本という枠にとらわれるという側面もあわせもっていた。

この琉球学に代わって沖縄学の定着の背景にも、沖縄における本土復帰運動に代表される政治的社会的な動向があった。そもそも沖縄学が、単に沖縄（本島ならびにその周辺離島）のみを対象にした研究の呼称ではなく、奄美大島から先島離島までを含む、いわゆる琉球文化圏を対象とする研究の総称であるとするならば、金城が用いた琉球学という呼称こそ、より一層、その内容を反映したものであったはずである。しかし実際は矮小化される形で定着したといえる。その理由は主に二つ考えられる。一つは日本復帰運動に象徴される政治的社会的な動向のなかで、伊波に代表される沖縄学の基本的な思想体質ともいうべきものが、政治的社会的運動と相互補完する作用をもっていたことである。もう一つは琉球という用語に必然的に付随していた蔑視と差別などの被抑圧の体験が、琉球という用語そのものに対する反発と厭悪をもたらしていたことである³⁹⁾。

伊波の没後（1947年没）、金城は伊波の所説を批判している。これは伊波のすべての論考に対して、批判的見解をほとんどもたなかった金城にとって、きわめて稀なことであった。その所説とは、伊波による明治期の「琉球処分」をめぐる評価である。伊波は「琉球処分は一種の奴隷解放也」と考える見解を発表していた。この見解は伊波の最後の著書『沖縄歴史物語』（1946年刊）においても発表されている。いわば伊波の歴史観を端的に示す一例となっている。しかし後年、仲原をはじめとして多くの研究者が、その批判をしている⁴⁰⁾。琉球処分の歴史的意義は、今日なお歴史学の大きな課題のままであり続けている。

金城は伊波の評価に対して、批判的な見解を述べる。金城は、

しかしながら、置県後の沖縄に対する日本新政府が、数百年来の奴隷の境涯にあった旧琉球王国の新たなる冷酷な主人にしか過ぎなかったか、あるいはまた、伊波先生の論文に述べてあるがごとく、真に奴隷解放者の名に値し、救世主として尊崇してよいものかどうかは、今次の沖縄戦や、明治の廃藩以降、昭和の敗戦までの、そして目下戦災孤児とでも称すべき、気の毒な国際的地位にある沖縄に対する、今後の日本の政策とその態度によって、後世の公平な史家が判断を下してくれるのを待たねばなるまい。明治十二年の琉球廃藩後における日本政府は、一部の論者が説いている通り、半ば植民地に対するかの様な政策をもって沖縄に臨んでいる⁴¹⁾。

と記している。

穏やかな調子ではあるが、明らかに伊波を批判している。しかし金城は単に伊波の見解を批判しているわけではない。批判することによって、沖縄研究が新たな歴史段階に入ったことを示している。金城は「政治上の大きな変動は、またこの国に対する新たな検討を行う契機ともなっている。外より来る支配者は、施政上その民情を知る必要から、また一方内なる国人は、その好むと好まざるとに拘らず、この激変せる環境に置かれた自らを省る機会が与えられる。つまり、政治的事件は、結果においては、常にその邦に関する学問の新鮮な刺激ともなっている」⁴²⁾と語る。大きな政治の変動による歴史の節目は、学問の刺激となるというのである。

さらに沖縄研究について、具体的な研究のあり方と方向性について、問題を提起している。金城は、

現在まだ啓蒙の見地から、沖縄と日本の文化の類同を強調して、その解説、紹介、宣伝することも手離す訳にはいきませんし、また学問の上でも、この方面の仕事は、もう済んでしまったなどと夢申しませんが、これだけでは片手落ちだと言うことだけは主張してもよいでしょう。そしてこれと同時に、この外に沖縄文化の中の非日本的な異質の諸文化の研究という、これまでの盲点にも照明の光を向けるべきであります。南島研究もその歴史の上では、今この新しい段階に来ているのであります。先に沖縄研究の楯の両面に譬えておいた、この二つの作業が、同じ歩調で進んだときに、沖縄文化なるものの全貌も、初めて明らかにされるのでありましょう⁴³⁾。

と語る。

この論考のなかで金城は、沖縄文化の研究を進めるにあたって、一国内の民俗学では不十分であると指摘する。沖縄にある習俗などの具体例を引きながら、日本文化のそれとは異質な中国文化や東南アジア、さらに南方諸地域の文化や習俗との関連で究明することの重要性を強調している。現在でこそ、広くアジアとの関連を解明する研究は盛んに行なわれているが、戦後の当時としては、このような問題提起は珍しいものであり、先駆的な提起といえる。言い換えれば、それまでの沖縄研究が、日本文化との関連のみを発掘して実証することに集中し、それに精力を傾けていたことに対する批判であったと考えられる。

金城は複合文化である沖縄の文化のなかに、日本文化と同一のものと異質のものがある事実に基づいて、それを研究することを楯の両面にたとえて、二つが同時並行的に進んだときに、初めて沖縄文化の全貌が明らかになると考える。ここに伊波に代表される「沖縄学」の限界を超えて、新しい可能性をめざそうとする金城の姿勢があらわれている。しかし可能性は開花をみることなく、金城はその5年後に不帰の客となってしまう。

金城は伊波に代表される沖縄学の基本的な思想体質を受け継ぎ、沖縄の文化を日本と同質・

同系とする前提に立つて、その実証作業を研究の中心においた。したがって伊波の思想を受け継いだために、その思想の限界性は、否定すべき側面としてみる必要に迫られたのであろう。金城に対しては必然的に、伊波に代表される沖縄学を批判的にふまえながら、日本文化との緊張関係はもちろんのこと、東アジアから南方諸地域との有機的なつながりを追究することが求められる。そのなかで琉球文化圏の文化の独自性と普遍性を、相対的に把握する研究の体系的取組みをめざすような学問領域をめざしていく必要があったと考えられる。これは伊波に冠せられた「沖縄学の父」という場合の沖縄学概念よりも、多様であり広がりをもった内容をイメージしなければならない。

しかしながら沖縄学は現実には、沖縄出身の歴史学者である宮城栄昌(1907-1982)のいう「郷愁の気持の働き」による使われ方がされることによって、その範囲を出ない概念規定が通用している。あるいは外間らによって批判的に指摘された、沖縄出身の研究者が取り組む沖縄研究に対してのみ通用して、本土出身の研究者の研究成果は含まないという事実にみられるように、しばしば排他的傾向に陥る危険性をはらんでいる。これは沖縄学という用語が政治的社会的な背景のなかで、伊波の沖縄学にみる否定的側面に対する批判を、政治主義的あるいは党派主義的な立場から抑え込もうとする動きがあったためであると考えられる。そのような動きのなかで沖縄学という用語が定着していったことにこそ、大きな原因がある。

沖縄学が定着する一方で、金城のいう琉球学という呼称は成熟しないままに消滅していった。そのひとつの理由は、前述のように「琉球」という言葉を厭悪する沖縄人の言語感情があったことにある。この風潮のなかで金城は戦前戦後を通じて、あえて琉球学という呼称を用いた。これは卑屈な風潮に対する金城による反発心の表現とみることもできる。そしてそうした風潮を超える学問的命題として、琉球学という呼称を用いたであろうと推測できるのである。

5 結びにかえて—沖縄学の可能性

近代沖縄は琉球国の解体と日本社会への併合、つまり「解体」と「再構築」という二つの側面でもとらえることができる。解体の側面では、旧体制の中核部分の実効性を失わせた後、琉球人の反発と抵抗を弱めるために「旧慣温存」という方針が打ち出された。再構築の側面では、琉球人を日本人化していくために、教育が重要な役割を果たした。さらに地域社会に固有なものの本質を変容させていくために「改変」という方法もとられた。

しかし解体と再構築は、近代沖縄に限られた現象とはいえない。まさに近代社会そのものが解体と再構築のプロセスであった。あえて沖縄の解体と再構築を指摘するのは、解体が「国家の解体」「琉球人の消滅」として、再構築が「日本化」「日本人化」として鮮明に出てくるからである。結局、現在まで繰り返された琉球の固有性再編への試みは、直接的に成功しないまま、形を変えて固有性を維持する力とぶつかり続けている。琉球社会に固有なものをかき消

し、またはすり替えていこうとする力と、固有なものを存続させようとする力の闘ぎ合いが、近代沖縄と日本との関係そのものであった。併合の過程それ自体が、固有なものを存続させようとする力を生み出し続けていることも確かである⁴⁴⁾。

現在、この沖縄を研究対象とする沖縄学は、大きく二つに分かれる。一つは「沖縄研究」とほぼ同義で使われる場合である。つまり独自の体系や方法をもつ学問分野ではなく、沖縄を対象とする人文および社会科学的研究もしくは自然科学的研究の総称とするのとらえ方である。沖縄に関する研究の総称であるので、すべての研究を貫く指標や基準はないものの、研究が実施された時代の特徴をとらえて、歴史的な分類整理が行なわれている。たとえば明治期から戦前期までの沖縄研究をとらえれば、おおよそ三期に分類される⁴⁵⁾。第1期（沖縄県外者による調査が中心）は、1879（明治12）年の琉球処分前後から1900年代初頭（明治30年代）まで、第2期（沖縄出身者による沖縄独自の問題に関する研究が中心）は、1900年代初頭から1920年代半ば（大正末期）まで、第3期（沖縄出身かどうかに関わりなく、研究者が増加し、研究の展開がある）は、1920年代半ば（大正末期）から1945（昭和20）年までである。

第1期の特徴は、官公調査と学術的な調査の二つの流れに大別できる。さらに官公調査は二つに区分される。その一つが琉球処分という政治的課題が中心となった調査であり、もう一つは旧慣温存や土地整理などの沖縄県の内部構造に焦点を当てて、諸施策の実施をめざした調査である。この時期の学術的な調査は体系化されたものではなく、厳密に言えば、学術的なものの萌芽であったといえる。さらに第1期の特徴は沖縄以外の出身者が、沖縄を調査対象にしたという特徴をもつ。第1期と第2期は、この点が大きく異なり、第2期は主に沖縄出身者が研究を推進したという特徴をもつ。

第2期の代表的な研究者は伊波、真境名、東恩納らである。この時期は沖縄各地の地誌なども刊行され、地域研究も広がりを見せた。1917（大正6）年には真境名らが中心となって「沖縄地理歴史談話会」が結成され、組織的なフィールドワークもさかんになっていった。沖縄の近代化のあり方に疑問をもち、主体性の回復を訴える声も次第に強まるなか、沖縄の歴史文化民俗に関する研究が発展する。

そして第3期は沖縄に県内外からの関心が高まり、沖縄研究者が増加した時期である。その火付け役となったのが柳田である。柳田によって影響を受けた、主に民俗学研究者の多くが研究成果を残すことになった⁴⁶⁾。この時期には1925（大正14）年の東京美術学校での「琉球芸術展覧会」が大きな反響をよび、その後「琉球ブーム」といえるものが東京を中心に起こったことも影響を与えている。琉球の美術工芸をはじめとして芸能に至るまで、広く注目を浴びることになる⁴⁷⁾。しかし琉球ブームは皮肉なことに戦争の時期と重なり、沖縄は日本にとって軍事的に重要な地域という意味付けがなされていく。

沖縄学のとらえ方のもう一つは、基本的には総称であることに変わらないが、総合性や体系性をめざすとするのとらえ方である。たとえば「各ジャンルの個別的研究を主体に、奄美研究や

先島（宮古・八重山）研究などの地域研究をも包括し、そのうえで沖縄の総合的・体系的な全体像の構築を志向する学術的性格をもつと同時に、沖縄の人々のアイデンティティーを追及する思想的性格をも内包している」⁴⁸⁾とされている。いわゆる学際的な研究への指向といえるが、実際には個別研究の細分化や専門化が進展してしまった。このとらえ方も前者と同様、すべての研究に通じる指標や基準が見出されていない。これを受けて沖縄の文化個性やその関連分野に関する研究と、沖縄のアイデンティティーを確認する内省の学としての思想や哲学を、必ずしも結びつけて語る必要がないのではないかという意見も出されている⁴⁹⁾。文化個性は沖縄研究として、思想や哲学は沖縄学として展開させればよいという意見である。現状では、沖縄研究は思想や哲学の問題が先行することによって、研究自体の進展が望めないし、その一方で沖縄不在の沖縄学の形成となりかねない状態にある。そこで沖縄学と沖縄研究の峻別あるいは新たな定義の見直しが必要であるというのである。

確かに沖縄研究として進展を図るのであれば、切り離すことは有効であり、これによって学問的方法の精緻化や研究対象の厳密化を進めることは可能である。しかしながら学問を体系化するうえで、文化個性の問題と、思想や哲学の問題を切り離して論じることとはできない。切り離すことは専門化や細分化に寄与するかもしれないが、体系化にとってはむしろ逆行することになる。そもそも哲学や思想なき学問は、学問として成り立たないからである。もしそうであるとすれば、ここでいう沖縄学と沖縄研究とは、むしろ結合する方向で展開しなければ、体系化された学問分野としての沖縄学は永遠に見出せないことになってしまう。

沖縄研究者の新川明（1931-）は、伊波の日琉同祖論につながる学問が、つねに政治的な思想工作の一翼を担って存在したという重要な要素を見落としてはならないと語る。そして学問的な側面と政治的かつ思想的側面をあわせもつそれは、決して個別に機能するものではなく、楯の両面のように、不離一体の関係のなかで相互に補完し合うものであると語る⁵⁰⁾。沖縄学と沖縄研究は切り離しがたいものであり、それは金城の学問的な展開の延長上に見い出されるものであり、あるいは金城がめざしたところでもある。

しかしながら沖縄学と沖縄研究は、その学問的精緻化が進めば進むほど、必然的に分離する傾向をもつ。このような傾向が進むなかで沖縄学（沖縄研究を含む）として確立できる途は、明治期以降における伊波などの沖縄の代表的な思想家による思惟の過程を丹念に読み解くことではないかと考えられる。その学問的な展開過程を通じて、学問的方法や分析手法は、どのように確立され、何から影響を受けたのかを明確にすることが必要であろう。この意味で現在では、これまでの思索と方法、その集積としての沖縄学の歴史的負荷をどのように問い返していくのかが問われている。これが今後の沖縄研究者に課せられた大きな課題である。

金城の生涯は、経済的に恵まれなかったものの、金城の周囲には伊波をはじめ、柳田、折口、東恩納、比嘉、仲原など傑出した沖縄研究者がいたので、学問研究の環境としては非常に恵まれたものであった。しかし多くの研究者から影響を受けた金城が、独創的な学問を展開し

ようとした矢先に、突然の死がおとずれた。伊波に代表される沖縄研究の系譜を、ある面において乗り越える視点を提示しながら、未完に終わってしまったといえる。

1955（昭和30）年に54歳で逝った金城は、その反骨ゆえに生活の不遇をあえて引き受け、自らの琉球学を体系的に完成する時間をもたなかった。言語、民俗、文学、歴史など広い分野にわたって多彩な活動をみせながら、琉球語研究の名著のひとつに数えられる『那覇方言概説』をのぞいて、体系的な研究成果は残していない。そのために金城における琉球学の概念を正確に抽出することは困難となっている。しかし金城が琉球学をいうとき、少なくとも今日における沖縄学がもっている後向きの排他的傾向とは異質の内容が想定できる。

沖縄学という言葉に積極的な意味を付与して考えるとき、伊波に代表される沖縄学の系譜において、金城は言語学、歴史学、文学、民俗学など多様な分野にわたる研究を総合することを試みた唯一人の後継者であった。この点で金城は伊波を超える可能性を秘めた特異な存在であったといえる。外間は『全集』の刊行に触れて、

沖縄に関する学問のすべてをトータルなものとしてとらえ、「沖縄学」と称するとすれば、伊波先生以後もっとも「沖縄学」的な生き方を貫いた人が金城朝永さんであったといえないだろうか（『沖縄タイムス』1974年3月1日付）。

と記している。しかし金城は沖縄学的なものを残さなかった。外間は続けて、

伊波普猷先生が『正・続をなり神の島』で、折口信夫先生が『月しろの旗』で、柳田国男先生が『海上の道』で、自らの沖縄研究のまとめた発言をなされたように、金城朝永さんにも、学問のすべてをかたむけた「沖縄」を、形にしてほしかったと思うのは私一人だけではないであろう。沖縄研究の今日的な動勢をみながら、私は、つくづく、金城朝永さんの学問を偲ばずにはおられない⁵¹⁾。

と記している。「沖縄的なもの」が否定される風潮があるからこそ、沖縄学が声高に叫ばれる。沖縄学は純粋に学術的な研究であったとしても、必然的に近代沖縄において、何らかの意義をもつ研究となるのかもしれない。この意味で未完の金城の学問は、今後十分に検討されるべき価値をもつものであり、未完に終わらせてはならないものなのである。

注

- 1) 伊波については、拙稿「伊波普猷と「沖縄学」の形成—個性と同化をめぐる—」（『京都産業大学論集 人文科学系列』、第42号、2010年、21～5ページ）。
- 2) 新川明「「沖縄学」の可能性—『金城朝永全集』にふれつつ」（『文学』、第42巻8号、1974年、930ページ）。

- 3) 渡邊欣雄ほか編『沖縄民俗辞典』, 吉川弘文館, 2008年, 84ページ, 552~3ページ。
- 4) 由井晶子「金城芳子(1901-1991)」(『環』別冊, 第6号, 2003年, 306~7ページ)。
- 5) 伊波普猷「琉球人の解放」(伊波普猷『伊波普猷全集』第1巻, 平凡社, 1974年, 494~5ページ)。
- 6) 金城朝永「伊波普猷先生の生涯とその琉球学」(大藤時彦・外間守善編『金城朝永全集(下巻)-民俗・歴史篇』, 沖縄タイムス社, 1974年, 457~8ページ)。以下では『金城朝永全集』は『全集』と略す(出版社名と刊行年も略す)。
- 7) 金城朝永「沖縄研究史—沖縄研究の人とその業績」(『全集(下巻)』, 412ページ)。
- 8) 真境名については, 拙稿「真境名安興と沖縄史学の形成」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第45号, 2012年, 1~34ページ)。東恩納については, 拙稿「東恩納寛惇と沖縄史学の展開」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第43号, 2011年, 14~46ページ)。
- 9) 村井紀『新版 南島イデオロギーの発生—柳田国男と植民地主義』, 岩波現代文庫, 2004年。
- 10) 由井晶子, 前掲論文, 2003年, 307ページ。
- 11) 金城朝永「那覇方言概説」(『全集(上巻)-言語・文学篇』, 8~9ページ)。
- 12) 仲程昌徳「インフェリオリティ・コンプレックスからアイデンティティーへ—「金城朝永」私論」(『新沖縄文学』, 第33号, 1976年, 81~2ページ)。
- 13) 服部四郎『日本語の系統』, 岩波文庫, 1999年, 38~9ページ。
- 14) 比嘉政夫「琉球民俗学は可能か」(『環』別冊, 第6号, 2003年, 176~81ページ)。
- 15) 柳宗悦「琉球の富」(柳宗悦『柳宗悦全集』第15巻, 筑摩書房, 1981年, 60~1ページ)。
- 16) 与那原恵『首里城への坂道—鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』, 筑摩書房, 2013年, 187~96ページ。
- 17) 柳宗悦, 前掲論文, 1981年, 49ページ。
- 18) 拙稿「比嘉春潮と沖縄研究の展開—インフォーマントとしての役割」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第46号, 2013年, 100~3ページ)。
- 19) 新里金福・大城立裕著/琉球新報社編『沖縄の百年 第1巻人物編 近代沖縄の人びと』, 太平出版社, 1969年, 101~4ページ。『琉球の民謡』は毎日出版文化賞を受賞している。
- 20) 金城朝永「沖縄研究の新段階とその意義」(『全集(下巻)』, 452~3ページ)。
- 21) 金城朝永「沖縄研究史—沖縄研究の人とその業績」(『全集(下巻)』, 401~2ページ)。
- 22) 金城朝永「沖縄現代史序説」(『全集(下巻)』, 374ページ)。
- 23) 同上書, 387ページ。
- 24) 同上書, 381ページ。
- 25) 金城朝永「沖縄研究史—沖縄研究の人とその業績」(『全集(下巻)』, 402ページ)。
- 26) 金城朝永「琉球に取材した文学」(『全集(上巻)』, 514ページ)。
- 27) 金城朝永「沖縄研究の新段階とその意義」(『全集(下巻)』, 450ページ)。
- 28) 金城朝永「琉球に取材した文学」(『全集(上巻)』, 518ページ)。
- 29) 外間守善『沖縄学への道』, 岩波現代文庫, 2002年, 119~24ページ。
- 30) 金城朝永「おもろ研究前史—田島利三郎先生評伝」(『全集(上巻)』, 451ページ)。
- 31) 新川明, 前掲論文, 1974年, 925~6ページ。
- 32) 金城朝永「伊波普猷先生の生涯とその琉球学」(『全集(下巻)』, 456~7ページ)。
- 33) 同上書, 457ページ。
- 34) 同上書, 457ページ。
- 35) 外間守善, 前掲書, 2002年, 119~24ページ。
- 36) 沖縄文化協会の果たした役割については, 拙稿「仲原善忠と沖縄史研究—郷土から生まれる歴史観」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第47号, 2014年, 239~78ページ)。
- 37) 鎌倉英也・宮本康宏『クロスロード・オキナワ—世界から見た沖縄, 沖縄から見た世界』, NHK出版, 2013年, 37~72ページ; 福永文夫『日本占領史1945-1952』, 中公新書, 2014年, 166~8ページ。
- 38) 与那原恵, 前掲書, 2013年, 301~6ページ。
- 39) 新川明, 前掲論文, 1974年, 926ページ。

- 40) 拙稿, 前掲論文, 2014 年, 239~78 ページ。
- 41) 金城朝永「沖縄研究史—沖縄研究の人とその業績」(『全集 (下巻)』, 401 ページ)。
- 42) 金城朝永「沖縄研究の新段階とその意義」(『全集 (下巻)』, 449~50 ページ)。
- 43) 金城朝永「沖縄文化研究の盲点—南島研究の新段階」(『全集 (下巻)』, 449 ページ)。
- 44) 後田多敦「神々の琉球処分」(『環』別冊, 第 6 号, 2003 年, 118~24 ページ)。
- 45) 沖縄県編『沖縄県史 別巻 (沖縄近代史辞典)』, 沖縄県, 1977 年, 83~7 ページ。
- 46) 第 2 期から第 3 期への研究の展開については, 外間守善, 前掲書, 2002 年。
- 47) 与那原恵, 前掲書, 2013 年, 228~34 ページ。
- 48) 沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典 上巻』, 沖縄タイムス社, 1983 年, 436 ページ。
- 49) 田場由美雄「沖縄学の歴史と現在—伊波普猷以後の素描」(『季刊東北学』, 2006 年第 6 号, 136~41 ページ)。
- 50) 新川明『反国家の兇区—沖縄・自立への視点』, 社会評論社, 1996 年, 61~140 ページ。
- 51) 外間守善, 前掲書, 2002 年, 122~3 ページ。

Choei Kinjo's Conception of Ryukyu Studies

Nobuhisa NAMIMATSU

Abstract

This essay examines the conception of "Ryukyu Studies" advocated by Choei Kinjo (1902-1955), an Okinawan researcher active during the Showa period. The few studies that have focused on Kinjo look at the connection between Kinjo's Ryukyu studies and "Okinawan studies". However, they date from the 1970s and appeared in the historical context of the reversion of Okinawa to Japan in 1972. In other words, they tried to re-examine Kinjo's Okinawan studies in this historical context, however Ryukyu studies subsequently disappeared, and the reason why is unclear. This essay re-evaluates Kinjo's research, and considers the question of why Ryukyu studies disappeared.

Partly because Kinjo died young, it has not been possible to systematize his Ryukyu studies. Since he left no systematic research findings, it can be said that Ryukyu studies were doomed to disappear. However, he did conduct broad-ranging research into language, folklore, literature, history, and so on, and his work had a systematic orientation. This can be said to have been quite different to the exclusive tendencies visible in Okinawan studies today. If we consider the term Ryukyu studies in a positive sense, it can be said that Kinjo, who tried to synthesize research in a variety of fields ranging from linguistics and history to literature and ethnology, was the only successor to the school of Okinawan studies led by Fuyu Iha (1876-1947).

Keywords: Choei Kinjo, Ryukyu Studies, Okinawan Studies, Fuyu Iha, Folklore studies